

# 育児の経験

光藤泰次郎



## 一 子 寶

律義者の子澤山といふ諺があります、私が律義者であるか否かは他の評に任せるとして、兎に角私は子澤山であります。八歳になる長男を始といたしまして、六歳の長女、四歳の次男、三歳の次女、二歳の三男と都合五人あります。成る程十八十五人の御子様を御持ちになる方と比較いたしますれば、敢へて多いといふ譯には行くまい、謂はゆる物の數でないかも知れませんが、四歳三歳二歳と三年連發したので、瘦腕には随分の重荷である所から殊に多いといふやうに、深く感ぜ

られます。さて山上の憶良でありましたか、萬葉集に、瓜はめば、子供思はゆ、栗はめば、ましてしのばゆ、何處より、來りしものぞ、まなかに、もとなかゝりて、やすいしなさぬ、といふ長歌をよみまして、其の反歌にも銀も黄金も玉も何せんに、まされる寶子にしかめやも、と喝破いたしました。この方、金銀珠玉、七珍萬寶にもまさるものは子寶であると相場がきまつたやうにあります。さて天から授かつた此の子寶を、日夜大切に守りかして、幸今日までには、一人も數をへらさず、又大した病氣にかゝらせた事もありません、皆健全で生ひたち行くのを深く喜んで居ります。

## 二 哺 乳

さて子供に哺乳を致しますに、何の乳が一番滋養があるかといふに、醫家の説によりますと、母乳が第一で、若し生の母に乳汁が分泌しない場合には、乳母の乳が宜しい。第二が牛乳で、第三がコンデンス、ミルクであるといふのが一般の定説のやうにあります。ところで私の宅では長男や長女を乳養する時に、母乳は十分に出ましたなれ

ども、母もさる處に勤めて居りますので、母乳のみで養ふ譯に參りません。そこで母の留守の間は牛乳を以て母乳に代用するをといひ、なほ足らざる時はコンデンスミルクを以て補ふをといひました。其の成績如何は頗る痛心いたしましたが、意外にも好結果を得まして、五人が五人ながら皆健全に生ひ立つて行きます。甚だ愉快に感じて居ります。さて哺乳をしまするに時間を定めてするとの得策なるは、改めていふまでもありません、苟も育児法の一冊を読んだものは誰も承知して居るとであります、其の實行は恐らく百人が百人難んずる所であらうと思ひます。一言で申しますと今までの習慣に束縛せられるので、其の習慣の力づよきを日本の社會に、泣く子と地頭には勝たれぬといふ諺があるによつても思ひ合せられます。母なる人は時を定めて哺乳すると覺悟はいたしまして、子供が泣き出すと、自分自ら氣がよはく、何となく可愛相なる心持がして、我と規定に背くものがありますし、或は祖父祖母が居りましたは可愛相だから早く乳をお上げなさいといはれ

ますので、心ならずも時間を守らなくなるをもあり、又家屋の構造から子供の泣き聲が近所合壁に聞えては、迷惑でもあらうし、又不仁な所行であるかのやうに思はれはしないかなといふ決心が鈍るともあるのです。所が宅では幸か不幸か母の外勤して居るといふことから、却て哺乳時間を正確に定めるのが出來たのは意外の幸福でありました。たい困つた事の出來たのは、長男が乳を呑む頃、母の乳が澤山出ますから、夜吞ませ吞ませしましたので、晝夜を顛倒させてしまひました事です。即ち晝間はよく眠る、夜はよく乳を呑んで、非常に母を困らせました。

### 三、食物

世の中に子ほど可愛いものはありますまい。又子を愛する愛情ほど自然で純潔で強盛なものはありませんまい。されば何處の親にいたしまして、我が食物を減じまして、我が着物を着させんでも、我が子良かれと祈るのがなべての親の情であります、この愛情があればこそ、人間の子といふものが育つのであります。この情愛があればこそ



そすべての動物に比して、非常に手数のかゝる子供といふものが無事に生ひ立つのであります。さりながら此の情愛を満足させる方法は、千差萬別であつて、人により家により、種々の方法を取つて居られるのであらうと思ふが、其の結果たるや、眞に子供の利益になるとばかりではなく、却て兒童に不利益を興ふるといふやうなことも、往々世間にあるやうに見受けられます。食物の如きも、子供可愛さの一點から、或は身分不相應の美食をさせたり、或は子供に不相應な滋養食をさせたり、贅澤の悪習慣を養成するといふとがわるやうですが、私の處では先左様のとは一切させぬやうにしてあります。それで親が見つくるつて與へたものは、甘いとか不味いかと、決して彼此言はせません。當てがはれたものは誰でも大人しくたべるやうにしてあります。

四、衣服

極端かは知れませんが、私は子供は男の子女の子共に綿服に限ると思ひます。それから又つくり方は男の子も女の子も共に筒袖に限ると思ひます。

成る程世間の風潮を見わたしまするに、男の子だけは綿服主義筒袖主義が沿く行はれ來ましたので私は大に喜んで居るのですが、此の反對に女の子は一年と非常に贅澤に流れて來て、華奢を競ひ、派出を争ふといふ有様で、實に苦々しく感じ居ります。諺に京の着倒れと申しますが、女の子の服装を見ますと、此の京は西京と解釋せず、東京と解釋しても當てはまるやうに私は感じます。それ故に私は女の子の立派な服装をして居るのを見ても、あれは縮緬の三枚がさねか、これは縮緬の裾模様か、それが當時流行の絞羽二重か、實に立派だ奇麗だ美しいなどと感じたとはない。いつでもわゝ馬鹿な事だ、親は立派な美しい着物を着せて、女の兒にも満足させ、自分も満足して居るだらうが、子を愛する方法を誤り、我が愛子の將來を誤る仕方だ、女の兒の虛榮心を増長させ華美を好み贅澤に馴れさせて、それが何の爲になつて笑つて居る次第である、成る程女の子は男の子と異つて着物の善し悪しをいひ、善いものを欲しがり美しいものをねだる風は確にあるから、何



も精なり柄なりを強ひて男の子と同様にする必要はない、無論異はせて宜しい。さればとて幼稚の女児に縮緬なり紋羽二重なんどは一切禁じた方がよからうと思ふ。しかし女親は矢張り氣がよわく、或は世間の人が皆美衣美服をして居るのに、うちの子ばかり質素な身装をさせてかくと、子供の氣象がいちけはせぬだらうか、ひがみの心は起しはせぬだらうか、など、心配をしたり、或は娘の時代が二度とあるではなし、立派な身装をさせてあげやうなど、考へるをもあるものです。しかし親なる人に主義があり、主張があつてするならば、子供といへども矢張り其の考にするとは出来ると思ひます。そして子供等に向つて、お前方には寒からず、見苦しからぬ丈のとはしてやるが、よい着物が着たくば自分に出来るやうになつて着よと言ひまかせておきます。

五、運動

親の身にとつて何が一番心配かといふに、子供の身體の弱い程氣になるとはありますまい。それ風邪をひいたといつて心配し、それ熱が出たといつ

ては醫者の所にかけつけ、それ咳嗽が出るといつては、吸入をかけ、そら引きつけたといへば氣も顛倒するばかりに驚き、水よ藥よ醫者よとあわて騒ぐはどこの家にも有り勝の事でしょう。實は子供の病氣には親の壽命はちやまる位なものである。これ故に親たるものはどうしても子供の身體の健全を積極的に計らねばならぬ。一躰この哺乳養に關して居るが、一面大に身體の健全不健全に關して居るのである。そしてこれ等は皆あまり大事をする醫家の説には賛成出来ぬのである。運動に於ても又其の通りで、水いたたらをしては冷が起るの、土間に跣足で下りてはいたかろらうの、など大事ばかり取つて居ては仕方がない。活動は兒童の生命で、彼等は目の覺めて居る限り、何かせずには居られぬのである。それ故に何かよい遊をあたへ、之を指導してやらぬと、障子を破る、襖を破る、新聞を破る、書物を破る、火鉢を持つ、火をかきまはす、箸を持つ、汗をこぼす、茶碗を破る、彼等の本能は活動にあり、彼等の使命は破

壞にありの感がある、教育思想のない父母や、兄弟や、乳母や下女は、そらあぶない、そら破つた、そらこぼした、そらどうした、そらかうしたと、忽ち彼等を抱き、忽ち彼等を背負ひ、彼等を乳母車におしこめ、もつて活氣充滿して、活動を本能とし破壊を使命とする兒童の自由を奪ふ。哀なるかな、兒童は其の自由を奪はれて、其の本能たる活動をするとも出来ねば、其の使命たる破壊を果たすとも出来ず、充滿せる活氣漏らすに由なし。それ故に如何に滋養物をとらしても、如何に衣服に注意しても、病氣にかゝり易い、顔色が青ざめて居る、決して肥えない、決して太らない、然るに我が家の如きは、人手の十分ならざる處より、注意して放任しておく、否注意が十分行き届かず、放任してあるとがあるかも知れぬ。けれども天道人を殺さず、皆善い鹽梅に大した病氣にもかゝらず、皆健康で、肥えてだんだん生ひ立つて行きます。

六、運動  
私は又子供に一種妙な運動をやらせませす。これ

は亞米利加の人がやつて、非常に子供を強健ならしめたといふを新聞か雑誌かで見つて、之れに倣つて始めたのですが、子供の數へ年二つになつた頃からやります。その仕方は、先づ子供を自分の方に向かせて、こちらの兩手で、子供の兩手を別々につかまへ、子供の足が疊をはなる程、引き上げ、之を左右に振るのです。老人や女などが見て居ると、實に劍呑がりまして、腕がぬけはしないか、およしなさいといふ。しかし徐々にやりさへすれば、二歳の幼時でも、決して抜ける氣遣はありません。今度は手のとり方は前と同様で、之を上下にあげさげするのです。次は幼兒を仰向けにぬかしたり、或は腹這ひにさせたりして、其の兩足を持ちて、左右に振るのです。これは女の兒などは最初は泣くのもあります。しかしそのそろならせばいつの間にかなれてしまひます。手の方も最初は一寸痛みを感ずるやうに見えますが、ぢきに馴れてしまつて、之を歓迎するやうになります。二年もやると手の力は非常に發達して、道

も三丁でも平氣で行くやうになりません。醫者にいはすと、それはわまり過激な運動だとか、腦に故障を起さうとか、いふかも知れんが、私が之を四兒に施した結果では、決してそんな憂はありませぬ。手足の強健を直接に増したは無論、間接に身體の健康を益したと少からぬと思ひます。しかしこれは御婦人には出來ぬかも知れません。第一思ひきりが出來ません。第二、四年なり五年なり毎日つゞけしむる根氣がいかにでしよーか。

八、運動と睡眠

ねる子はふとるといふ諺があります、どうも眞理のやうに思はれます。書問の間十分活動をして、食事を澤山とつて、食事の最中からこつりこつりと居眠りをはじめて、寢床へ移されたのも知らず、それから一度も眼をささないで、翌朝までぐつぐつ眠つて仕舞ふ子供は實に羨しく思はれます。年齢によつて幾分相違もありませんが、兎に角十時間以上熟眠が出來るのであるから、日に日にふとるそたつが目に見えるやうに思はれるのも無理はない。さて世間にはやく子供をねかせつけるとい

ふことをやるが、随分無理な事があるやうだ。また活氣が消費しきれないので、睡氣が來ないうちに眠させようと思ふから、大變に子供に世話がやけるのである。宅ではさういふ場合は、子供と一所になつて、例の運動をはじめ、又かけつこをやる、とびつこをやる、唱歌をうたふ、すべて活氣をもらしてやると、直に睡氣を催す、横になるとすぐねいるといふ有様で、誠に世話なしである。

(おしまひ)

